

第8回 課題 解答例

今回の課題 一教育の選抜機能に関してどのように考えますか。 具体的に以下のようなことです。 1 競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことと思いますか。 2 受験という競争に関してどのように考えますか。 3「能力主義」や「学歴社会」に関してどのように思いますか。 4 教育と格差の関係についてどのように考えますか。 5 教師として教育の選抜機能をどのように扱いますか

A

1 競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことと思いますか。ー私は必要だと思う。優劣をつけるのではなく、競い合う過程に意味があると考え。一人では自分を客観視することが難しい。自分の学びの進行度や到達度などは、相手がいるほうがより見ることが出来ると思う。

2 受験という競争に関してどのように考えますか。ー受験に関しては悪いとは思わない。受験という目標に向かって努力し、合格後、自分のレベルに合った環境で学ぶことでまた競い合いが出来るからだ。しかし、受験の影響が大きくなりすぎており、目的が「学びの向上」から「学びの暗記」になっている気がする。

3「能力主義」や「学歴社会」に関してどのように思いますか。 ー親の身分ではなく、その子自身の才能や努力が評価される能力主義は素敵だと思う。この真意は対象人物と一対一で向き合い、対象人物の中身をみて、知ることだと考える。その点からすると、学歴社会は身分制度へと逆戻りしてしまったように感じる。なぜなら、対象人物と向き合わず、対象人物の持っているスキルレベルに視点を置き、能力ありか・能力なしかの二択に分断してしまっているからだ。

4 教育と格差の関係についてどのように考えますか。ー高学歴を与えたいのか、学びを作りたいのか。私は学びの機会を提供し、その子の学びと一緒に創りたい。だが、現代社会においてその子のためになるのは高学歴の提供であって、高学歴獲得のための学びづくりへとなってしまっていることが事実である。私の考えは現場を知らないがゆえに理想・きれいごとであって、実際の現実は厳しく冷たいため、分からない。

5 教師として教育の選抜機能をどのように扱いますかー学校の成績だけを鵜呑みにせず、一人の人間を知るという視点を持ち、選抜機能に囚われすぎないように注意したい。また、選抜機能が子どもたちにとってストレスフルな状況になってしまわないように注意したい。

B

1, 競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことと思うか。私は、競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことだと考

える。なぜなら、その人の競争心がきっかけで向上心にもつながることがあると考えるからである。このことについて、次段落で私が野球で経験したことをもとに論じていこうと思う。

私は小学校3年生から高校3年生まで野球をしていた。その際、ポジションがかぶっている選手と競い合い、ポジションをめぐって争うことがあった。そういった競い合いは自らのプレーを磨いたり、人間的に成長しようとしたりする向上心にもつながっていたと感じている。競い合うことで個々が磨かれ、チーム全体の雰囲気も良くなっていくという点において競争心によって上を目指そうとすることは必要であるとする。

以上のことは、勉強においても大切なきっかけになると考える。現在、「主体的で対話的な深い学び」というものが大切であるというように言われている。勉強ができる子が必ずしも正義ではないが、ある程度競争心があるほうが「主体的で対話的な深い学び」にもつながっていくきっかけになるのではだろうか。特に「主体的な学び」という点と「深い学び」という点においてはどうしても児童側の好奇心や主体性が必要になると考える。(教師が芽生えさせることも大切だが)

以上のことから、私は競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことだと考える。私は教師として、うまく児童の競争心に火をつけ、児童を楽しませながらクラス全体で成長していけるようなクラス経営をしていきたい。

C

1.競争心によって頑張ろうと上を目指すことは必要だと考える。なぜなら、それが1つの目的やモチベーションになると考えるからだ。

ただ学校や塾に行き、そのまま情報を吸収したり、部活やクラブ活動などで楽しく運動したりするだけでは知識や経験は身につかないのではないだろうか。私自身勉強による競争心はあまりないが、運動(部活)の中での競争心は強くあった。あの子より上手になりたい、あのチームに勝ちたい。その競争心のおかげで、なんとなく部活に出てなんとなく練習するのではなく、「ここを意識しながら練習しよう」や「あそこを狙おう」など目的をもって、部活を有意義な時間にするのができた。この経験があるからこそ、競争心があるからこそ、体力や精神を鍛えられたのではと感じている。対人関係においても競争心によって、ライバルという存在がいるから良い成績が出てくるのではないだろうか。「1人ではない」、「誰かに勝ちたい」そう思い頑張ることができるから、勉強や運動には競争心が必要だと私は考える。

2.自分の能力を知る1つの手段としてあってもよいのではないだろうか。近代以降は職業を自由に選べるようになった。だからといって、なんにでもなれるわけではない。医者や弁護士などはたくさんの知識を学び、試験を受ける。パティシエや美容師も専門的技術を学ぶ。これらの専門職だけでなく、様々な企業がある。それぞれ得意分野があるだろう。将来なりたいもの、目指すもののために自分がどこまでそれに近づいているか、目指すことができるのか、知ることができるのは「受験」というものではないだろうか。上記の1でも述べたよ

うに、競争心や競争というのは目的やモチベーションになる。自分の思い描く未来を実現するために受験というものがあってもいいのではないだろうか。

D

教育の選抜機能について、具体例 1 競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要と思うか・3 「能力主義」や「学歴社会」に関してどのように思うかの二点から考える。

1 競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要と思うかという質問に私は「はい」と答える。なぜなら、人と争い勝敗が決まることで負けたくないという願望が現れ、上に行こうと必死になって物事に取り組むからだ。しかし、講義メモ「人は競争によって～得るものではないと考えるか。」という文を読み、順位や勝敗がつくから頑張ろうではなく、物事が楽しくてたまらない競争は脇役の方がきちんとした知識や技が習得できると考えた。また、授業資料 8-1 選抜に基づく教育システムの理念型を読み、勝利することが大きな目標だとトーナメント型の場合、ずっと戦わなければならないため、物事本来の醍醐味を失ってしまう可能性があると考えた。

3 「能力主義」や「学歴社会」に関してどのように思うかについて、試験では能力が高く高学歴の人が有利で人間性を考慮していないと思い、能力主義や学歴社会の世界はよくないと思う。授業資料 8-1 エリート選抜からマス選抜へを読み、学歴社会が顕著に出ていると感じた。しかし、私は選抜の場では学歴や能力だけでなく、人間性も見て可否を判断して欲しい。なぜなら、選抜の場に行くときは自分の価値をよくするため、猫をかぶっている人がほとんどだからだ。もし人間性が低かった場合、試験では好印象を与え合格したとしても結局は人同士の関わりが重要であり、他者に悪影響を及ぼすと考えた。今ではそういうのを防ぐために就職先が受験者 SNS のアカウント確認をこっそり行っているところもあるらしいが、一番は受験者の本性がわかる環境で対面で話したほうが良いと思う。

1・3 共に、時と場合によっては使用してもよいと考える。しかし、すべての試験が適用されていた場合、選抜の情報としては適切ではないと思う。

E

3 「能力主義」や「学歴社会」に関して、私は全ての人にとって平等ではないと感じます。授業資料で「学歴社会」の説明には才能や努力が評価される側面があるとありますが、才能があっても学校、家庭の環境次第では才能が発揮されることはないと考えます。というのも授業資料 7-2 でもハーバード大学に通う生徒の多くは比較的裕福で、幼い頃から塾に通っていたり、本人だけの努力で合格している訳では無いとも記載されています。もちろん本人の才能や努力があつてこそ合格ですが、才能があつても「親ガチャ」次第では家庭は貧しく、アルバイトを強制されれば勉強にも時間を使うことは出来なくなり、競走には敗れてしまうと感じました。「学歴社会」や「能力主義」について公平性を保つために、全て

の人に質の高い教育を均等に提供することが重要だと思います。経済的や地域による格差を減少させるために、国が奨学金や補助金制度を整える必要があると考えました。また「学歴社会」による社会の格差を少しでもなくすために、学歴だけの評価ではなく、スキルや経験なども評価対象として加えることが大切だと考えました。

F

私は競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことだと考える。近年では Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字をとった VUCA(ブーカ)とよばれるものもでてきたが、この意味にもあるように先のことは予測が困難になっている。そこで求められるのはそれに対応できる対応力や柔軟性、適応する優秀な人材であると思う。そのために必要なのは様々な分野で特化している人材や人手ある。そのように考えると私は競争が必要になってくるのではないかと思う。教育を平等にし絶対評価にしオール 5 にするということは、親も児童も得意不得意を自分たちで見極めることになり比べることをしないということだ。もちろんそれにより好きなことを伸ばしたり得意なことを自分で見い出すことはできるが、それでは先程の話にもあった予測困難な将来に対応出来る優秀な人材は、平等になるがあまりに特化した人材が育たなくなってしまうのではないかと思う。そのため競争心によって上を目指すことで児童期の時点で自分の得意なこと・好きなことを多く見つけ、そこで親や児童自信がしたいことを特化して伸ばすことで、この先の予測困難な時代も国として対応していくことが可能になっていくと考える。しかしそれにより自信をなくす子も出てきてしまう。私自身も小学生の時、学校での陸上クラブで高飛びをした際に全然飛べなくて自分は陸上の才能がないんだ。入らなければ良かったなと感じたことがあった。しかし競技を変えて次年度、長距離走として参加した際には選手として走ることができる程だった。そのように走る才能があるのにも関わらず、競争をすることによって陸上全体が才能がないと感じてしまうといったことが学業にも起こる可能性はある。そこで教師として児童に様々なことに挑戦させて得意なことを見つけるサポートをすることや、得意不得意が人間にはあり不得意なことを克服することも大事ですが、得意なことを伸ばすことの大切さや個性について理解し気づかせることが教師としての役割なのではないかと考える。

G

昔は親や家系の身分に影響され職業や生き方が人により決められてきたが、『身分社会』から『学歴社会』・『能力主義』へと変化したことにより外面ではなく人としての内面の部分や努力をした分が個人として評価されるようになった。これらは、多様性の社会においても個人を尊重してとてもいいものだと考える。だが、問題点もあると考える。それは、一度頑張ってついた成績や評価によって下の人と差別されるということだ。確かに努力あつての学力かもしれないが、一度高学歴な??大学に受かり卒業できたからその人は優秀なの

であろうか、国語や数学が出来れば世の中への貢献ができるのか。また、いい大学や高学歴でなければダメなのか。など様々な問題について考えていかなければならないが、だからと言って勉学をしなくて良いという訳ではなくとても難しい課題であるとする。『能力主義』も『学歴主義』も決して悪いことではなく何かを努力した者の証だと思う。だが、社会を生きていく上でなにかに満足し下の人や他の誰かを見下したり、自分だけ優越感に浸るという行為が人をダメにするものであり、そういった常にその場で満足せず、成長し続けたいと思えるような個人を育成できる教員になりたいと、また自分も常に子供たちと成長していきたいと強く感じた。

H

受験に関して私個人の意見としては、「受験」という競争がそれぞれ個々の能力を引き立てるものになっていることは間違いないと考えている。だが、その勉強が「受験」の為の勉強になっていることとも考えます。

一番強く感じるのは「英語」で日本は文法や長文読解など文章に関することが多くなっている。英語科の課題として、受験の対策としての知識が身についたとしても実際に英語で話せるかといったら話せないという人が多いという現状であります。もちろんある程度の基礎知識が必要であると思うが、そこでおわりになってしまっている可能性がある。

対策として、大学受験では4技能を求めるなど、変わっているが受験生の心構えとして、やはり文法などの書くことに目を向けた勉強になっている。学校の教育にも意見する生徒もいる。

このことから受験というものがあることから勉強の意欲が出ているが、将来に対してつながらない勉強になっている可能性があるので、受験の形態が変わることがあれば勉強の形が変更され、今まで行っていた勉強に加えて、何かできるようにすれば少しは良くなるのかと考えます。

もう一つの私が考えるものとしては、競争意識が生まれると書いたが、それは全ての人が生まれるかといったといたらそうではなく、受験に対して意欲のない生徒もいます。社会に出る、貢献するには基礎知識は絶対に必要だと感じています。そのような生徒がどのようにしたら勉強に対して意欲がでるのかどうかを考えていく方法を考えていかなければいけないと思いました。

他にもメリット、デメリットともにあると感じていると思うが、「受験」というものなくす方が良いかと言われればそうではないが、受験の方法について考える必要があるのではと考えました。具体的にどのように変更すればよいのかはまだ考えられていないが、今後競争社会の課題について調べ、それに対してどう国が対応しようとしているのかなど調べていこうと思います。

I

①私は勉強や運動において、必ず競争心が必要だとは考えていない。競争心によって、他者よりも上を目指したいという目的の 1 つとして、競争心があることは間違っていないと考える。ただ、人によっては他者と競い合うことを目的としていない場合もある。例えば、私は周りよりも優れたいと考え日々学習しているわけではない。私自身の目指す夢や目標を叶えるためには、他者と競い合うのではなく協力することが一番有効であると考えている。競い合うことに固執してしまうと、良い考えであっても他者の意見を取り入れられなかったり、勝つことに執着し冷静に物事を判断できなくなってしまうりする。

このような場合もあるため、あくまで自信のモチベーションを上げるための目的の 1 つとして、競争心を持つことを否定はしないが、必ず全員に必要だとは私は考えていない。

③私は能力主義については賛成だと考えている。なぜなら頑張って努力し成果を出した人や、会社をより良くしようと工夫して働いている人ほど給料を多くもらえるからだ。必死に努力し会社に貢献している人は、それに見合った対価を貰うべきである。

学歴社会については反対だと私は考えている。なぜなら、学歴ではなく能力を見た上で評価すべきだと思うからである。学歴を重要視するのではなく、これまでの人生で何を学び、経験したことを如何に労働に活かすことができるのかを重要視すべきである。学歴が良くとも学歴を過信し、努力せず成果を出さない人よりも、学歴が劣っていても必死に努力し、会社に貢献している人に相応の対価を与えることが、会社の成長を促すことに繋がると私は考える。

これらの理由から能力主義については賛成だが、学歴社会については反対だと私は考える。

J

1 に関して一競争心によって頑張ろうと上を目指すことは勉強でも運動でも必要だと考える。

個人的に、競争心は向上心だと捉えている。競争には点数がつきものだが、数値化されたものを、今までの自分や他者と比較してみるとどのような差があるのか見直し、改善することに役立てられる。

仮に競争がなければ、勉強や運動を続けている楽しさや面白さが減ってしまうのはいだろうか。同じことに取り組んでいる周りと比べて、自分の現状を客観視してなぜ差があるのか、今までのやり方を見直せばもっと伸ばせるのかなどを考えることも、競争心があるからこそ出来ることだと考える。

また、努力をしたことによって周りよりも良い結果をおさめられたら、自分自身の自信にもつながるだろう。競争心をもって取り組んだ経験が、またやる気を生み次の目標を見つけて意欲的に取り組むきっかけになっていくと考える。

3・4 に関して一資料 7-2「ハーバード大に合格する学生は家庭・家系的に恵まれてい

る人が多いが、当の学生は自分の努力と勤勉のおかげと答える」という内容が印象深い。幼いころから様々な習い事をして自身の可能性を広げられることや学習環境を整えることができるのはやはり恵まれた環境であり、すべての人がそのような環境にいるわけではないところが教育の差が生まれる原因だと改めて感じる。

教育の差＝経済力の差という社会的問題点はよく耳にするが、問題点はそれだけではないだろう。必死で勉強したことで、自分は優秀であると自負して天狗になってしまい見下したり欲や保身に走ったりする人もいるというのもまた、能力主義社会であるがゆえに生み出された悪い慣習だと考える。

何事も競争ばかりの社会だが、向上心をもって取り組める人もいれば、それにより本来の目的が見えなくなったり疲れてしまったりする人もいる。競争に対する価値観は人それぞれ異なって良いはずだが、今の社会は「人生は一生続くマラソンレースを押し付けている」と言えるだろう。

K

今回の講義メモや授業資料を読んで私はまず、講義メモの最後にかかれていたそもそも競争に価値はあるのか？について意見したい。価値があるから競争するのではないのかと私は思う。競争に価値はないといい、そこから逃げようと、皆が平等に暮らせる社会を、資本主義から逸脱しようとした思想、社会主義をとった国は皆結末としてどうなっているだろうか？ほとんどの社会主義国家は衰退し崩壊を迎えている。私は特別そういった思考に対して何かアンチだったり、競争が素晴らしいとか思っているわけではない。しかし結果として歴史が示していることが正解とまではいうつもりはないが、表れていると思う。ただ地位が高かったり、競争に勝ったのであればその恩恵を享受する権利はあると思う。しかし、享受するのであればそこにあぐらをかくのではなく、地位が低かったり、今まで敗ってきた人たちに最大限の敬意を示し、救いの手を差し伸べることが人として大事なことはないのかと思う。アフリカ人のサッカー選手であるモハメド・サラやサディオ・マネ、カリドゥ・クリバリのような人としてもかっこいい勝者のようにここで4の教育と格差について私の意見を述べようと思う。正直に言ってこの資本主義社会の現代において身分や立場について、不平等だ！と叫ぶことは、格差があってはならない！と声を大にして言うことは情けない、非常にダサい行いに思う。もちろん格差をいいとは思わないし、なるべくないことが望ましいと思う。しかし、正直勉強やスポーツに関して言えば、生まれた家や子供時代の生活環境や親・保護者の姿、才能などは数学で言うところの定数であり、自分がどう足掻こうと変わることのない固定値があると思う。それを嘆いているばかりの、競争から逃げたものがこの教育と格差について叫ぶのだと私は思う。そんな定数をどうにかしようとするよりも、自分がどれだけ努力し、自分が今いる環境を変えられるようにもがき、自分に矢印を向け続けることで成長する、成長することで伸びる部分、数学で言うなら変数の部分にこだわれるかが大事だと思う。正直スポーツをプロになるつもりでやったことのない人だった

り、何かに夢中になったり、自分自身を削ってでもいいと思えるほど本気になったことがない人ほど、こう言ったことを嘆く傾向にあると思う。勝負することもせずただ逃げている、負けることを嫌うくせに努力をしない、努力を恥ずかしいと思う人ほど。本気で取り組めば結果が望んだものでなかったとしても、達成感ややり切った感覚を得られ、後悔もなく次に進めると思う。自分自身で過程を褒められるようになると思う。私は競争があることは自然なことであり、あっても悪いことではないように思う。ただ結果が全てと思うことが良くないだけで、過程も評価してあげることで次に向かわせること、矢印の向いてる向きを外から自分へ向けであげることが教員に必要なことだと思う。

L

私は、上を目指す上で競争心というものは欠かせないものだと考える。理由としては二つほど挙げられる。

一つは、授業資料 7-1 で、『社会的地位への適切な配分が達成されるためには、できるだけ多くの人が選抜の過程に参加する必要がある、そのためには事前に人々の意識が十分に加熱されている必要がある』と記述されているが、そもそも意識を加熱させるうえで、好きや楽しいだけでは、足りないと考えているからだ。そもそも、好きや楽しいという感情では、その物事に対する嫌な部分を見つけてしまったり、挫折を味わった際にその感情は消え、続かない可能性が高い、しかし競争相手、いわゆるライバルがいる場合は、仮に相手を上回った場合でも、さらに上のレベルに競争相手がいるため、消えることなく常に上を目指し続けることができる。これは、運動の場合で言えば、トーナメントなどで今まで勝てなかったチームに勝った後に、自分の他に勝ち上がってきた更に強いチームと戦うことになること等が挙げられる。勉強においては、クラスで1番になっても、学年で更に上の人物がいることや、仮に学年一位になった際でも、全国模試等で自分より上がいることを知れたり、運動と勉強ともに競争心は煽りやすく、競争相手がいるということは自分を磨くことにつながると考えられるからだ。

もう一つは、結局のところ社会に出た際に、職種にもよるが競争とは切っても切れない縁だということが挙げられる。会社内では、同僚や後輩よりもより良い売り上げを、プロのスポーツチームであれば、相手よりも上の実力を求める必要がある、学生のうちから競争社会というものを経験する必要があると考えるためだ。

M

1 →私はこのことに関して運動では必要なことだと思うが、勉強においてはあっても良いが、表面にだす(教育の場で教師がそれをだすこと)のはあまりよくないと思う。スポーツについて私の経験から話したいと思う。部活動でよく練習試合をするチームがいたが強いチームで毎回ただ試合をこなすことだけを考えて参加していた。しかしチームでその相手チームに勝つことを考えて取り組んだら、1回だけだったが勝つことができ、その時期に県大

会にも出場することができた。それだけスポーツにおける競争心は上を目指すのに最高級
の材料だと思う。しかし教育においては一部の如くとは思わない。たしかに競争心があると
相手に負けないため勉強を熱心にし、いい成績やいい学校に入れるかもしれない。しかしそ
れはそれに勝つことにフォーカスが当てられていて、勉強をして学ぶということにはあまり
繋がらないのでは無いかと思う。生徒目線からしたら、たくさん勉強をしてストレスを抱
えながら、いい成績を貰い、いきたい学校に行くことができるといったゴールイン(達成)で
きて嬉しいと思う。その結果、資料 7-2 のように人を見下したり尊大をしてゴールしてい
ない人を見下し、自分はあたかも偉いかのようにふるまってしまう状況が発生しえない。せ
かくいい成績でいい所に所属したとしても、優秀でない人(自分より下の人)に対して否定的
な立場をとってしまうのはもったいない。しかし学びを提供する教師側としては 勉強=競
争心があれば上に行けると教えてはいけないと思う。資料にも学校が社会的存在の中心
的な位置を占めているとあるが、私は学校で学び続ける人間を育成する場所だと思っている。
学び続ける人間になるために、競争心は必要ないと考える。勉強において競争心が必要な部
分もあるが、教員としては心の中に留めておき、競争から得られる一瞬性のものよりも継続
性のあるもの(=学びつづけること)が重要になってくると考える。しかしそれでも学びつづ
ける人間の育成では足りず、学習(知識)が必要であり、競争心によって行く学校・就職する
所にはつきものであり、必ず競争が発生する。そこで資料 7-1 にある「再加熱」が日本にあ
ることに目を向け、教員がそれを伝えるべきだと考えた。生まれや環境がどうであれ、学ぶ
側としてスタートラインを揃えてあげ、可能性を与えてあげると学歴社会だとしてもこ
もたちの秘めた競争心が悪い方向に進まずに済むのではないかと思った。

N

1 運動でも勉強でも競争心によって頑張ろうと上を目指すことは必要だと考える。私自
身勉強においても、スポーツにおいても競争があった方がやる気が出る。競争心から、「こ
の人よりもいい結果になりたい、この試合は負けたくない」と思い、より練習や復習を頑張
った。その競争心が、子どもたちのやる気を引き立て物事に没頭するきっかけとなる。また、
復習や練習の習慣づけがなされるのであれば、これ以外の場面でも良い影響を及ぼすと考
えた。

2 先ほど 1 の質問で競争が必要と回答したが、受験という競争は必要ないと考える。な
ぜかというと、「入試突破のために力を出し続ける。ストレスまみれのようだ。」(資料 7-2
参照)が理由だ。受験の突破のために勉強し、それが子どもたちのストレスになっているの
であれば廃止すべきだと考える。受験の代わりになる方法を上げろと言われても、今すぐ
には思い浮かんでこないが、子どもたちの個性や考えを尊重した方法を考えて行くべきだ
と思う。

3 能力主義や学歴主義といった考え方はあまり良い考え方ではないと思う。2 の受験の
話と関連があるが、「難関大に合格したエリートは尊大になり、そうでない人を見下すよう

にならないか。」(資料 7-2 参照) という思考を持った人が現れてしまう。もちろん勉強をたくさんし、エリート大学に合格した頑張りはとてもすごいことだし尊敬する。しかしその一部の人が見下したり、貶したりすることがある。これは学歴主義という考えがあるからだろう。このような行動は自分達の印象を下げることになるだろう。また、企業も学歴で人を見て、採用するか決めることがある。それは、表面でしか見ておらずその人の内面(個性や考え)までは見ていない。「〇〇大出身だから」という理由で採らないのは違うと思う。これも学歴主義の考えがあるからこのようなことが起こるのだろう。一部の人が良い思いをする考えではなく、みんなが良い思いをできるような考えが広まっていくべきだと考える。

O

2.3—授業資料 7-2 を読んで、受験について振り返ってみた。私は、家の近くの保育園に通い学区内の公立の小中学校へ進学した。そのため、“お受験”というものには程遠い生活をしていた。反対に私の幼なじみは、小学校から私立に通い、いわゆる“お受験”を経験している。今回の資料を読んでその子とその母親から聞いた話を思い出した。資料には、家庭的にも家計的にもかなり恵まれている人が多く、学生本人だけの能力や努力で入れたわけではないのだという言葉があったかその通りだと思った。幼なじみの母親が小学校のお受験は、母親同士の戦いであると言っていた。就学前の多感な時期に様々な場所に連れて行き、たくさんの習い事をさせ、小さい時から経験を積む。お受験ではこの経験が大切になってくるらしい。これは本人が望んだことではなく、1 種の母親のエゴなのではないかと思った。しかし、当の本人は何も気にすることなく、私立に通えて良かったと話している。その子の母親いわく、いい学校に行けば、いい生活ができて、いい会社に就職できるらしい。小さい時に頑張れば大きくなったら頑張らなくていいという話を聞いた時、私は疑問に思った。私自身特別にいい学校に通った訳ではないが、幸せに生活出来ているし、将来やりたいことまで決まっている。別にいい学校に入らなくても幸せに生活が出来ると思う。3 に繋がってくるかもしれないが、日本は学歴を中心に置き過ぎていると思う。勉強ができる=仕事ができる、勉強ができない=仕事ができないなのだろうか。もちろん勉強ができるに超したことはないが、学歴よりもその人自身の人間性や個性をもっと見てあげるべきだと思う。これからの日本には、高学歴の人よりも、人間性が高い人が必要だと思う。

P

< 1 について >— 競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことであると私は考える。もちろん勝つことだけを考えたり、負けが悪いことである考えたりする必要はない。しかし競争は、やる気を出すための動機付けの 1 つであると考えられる。

そして何より、競争には“敗北”や“挫折”が存在する。私は勝利よりも敗北や挫折から学ぶことの方が多いと考えている。そのため、勝利のために試行錯誤を重ねたり自分自身と向き

合ったりする過程や、敗北や挫折の後に原因や解決策を考え・実践したりすることで、自心が成長できるのではないだろうか。

このように競争(心)には、動機付けの効果や、自分自身を見つめ・試行錯誤する過程が存在すると考えられるため、勉強や運動でも必要であると考ええる。

<2について>— 受験という競争は、私はあまり良いとは考えられない。<1について>では競争(心)が必要であると回答したため、矛盾しているとも考えられるが、受験はたった1回の試験で学校や職場が決まり、今後の人生を左右することになるため、その仕組みで良いのか疑問に思う。

<1について>の最後に記述した動機づけの効果は受験にも存在するだろうが、その後記述した課程については受験には存在しない。(失敗したらそこで終わってしまうため)

そのため受験という競争は、資料にもあったように“チャレンジ”という面では良いが、そのチャレンジは一か八かの賭けとなってしまうこともあるため、私はあまり良いとは考えられない。

<3について>— 「能力主義」と「学歴社会」について、「能力は本人の努力ではどうにもできない“運”のようなものも関わってくるのに、学歴だけを重視するのはどうなのだろうか」と考えた。学歴はその人の努力を表すものとも考えられるため、重視しなくても良いとは思わないが、学歴の優先順位を高くして人を選別するのはどうかと思う。よく、「学歴と仕事のできは比例しない」という言葉を耳にする。そういったことから、学歴だけでなく、人の中身・人間性も選別において重要視する必要があると考える。

しかし資料7-2にあったように、高い学歴を得るためには、それなりの努力・ストレスは要するため、高学歴の人間が優遇されるべきという考えも完全に否定はできない。そのバランスが難しいところであると感じた。

Q

1. — 結論、競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことではないと考える。もちろん他者と競争することでやる気は出るが、頑張る目標によっては無意味になってしまう。

例えば、私が高校生のとき、仲の良いグループの中で定期テストの合計点数が1番低かった人が購買のパンを奢るという罰ゲームがあった。当時は負けないように必死に勉強していたが、テストでいい点数を取ることをだけを目指していたため、テストが終わった途端、乱雑に詰め込んだ知識が一気に頭から抜け落ちてしまう。それは、今思えば何も自分のためになっていなかったと思う。

勉強でも運動でも結果が全てという考え方もあるが、私はその結果に行き着くまでの過程が1番大切であると考ええる。さまざまな科目に興味を持ち、学ぶことによって得られる新しい知識への興味関心から夢を見つけ、それを実現させるために勉強し、大学進学等を目指す。これは簡単なようでとても難しいことだが、他者と比べたり競ったりせず、同じ夢を

志す同士と共に励まし合い、高め合いながら自分のために自分のペースで勉強することが将来に繋がると考えた。また、その過程を大切にすることによって、結果どこの大学等に進学することになっても花開く考える。

3.一「能力主義」や「学歴社会」に関してどのように思うかについて、私は、重要なのは、個々の能力や実績が適切に評価され、機会均等が確保されることだと考えた。

授業資料 7-1 より、身分社会の時代から、個人の能力や努力次第で高い教育を受け、その学歴で高い地位や収入の得られる職業に就くことができるようになったことは、とても素晴らしいと思う。しかし、授業資料 7-2 のように、高学歴者が競争に敗れた人を見下す学歴至上主義のような考え方は格差社会に陥る大きな要因となってしまう。

勉強のできる者がよい大学に入り、仕事のできる者が高い給料をもらうというのは、ある意味当たり前のことであり、逆に明らかに実力の差がある者と同じ待遇だとしたら、割に合わず不満が募ると考える。

一方で、授業資料 7-2 にあるように、家庭的にも家計的にも恵まれている方が勉強する環境が整っているため、将来において有利な立場であるという考え方もよく理解できる。

結論として、とても難しい問題ではあるが、能力や学歴だけで人を判断せず、それらも踏まえて適切に評価され、人柄や個性も評価に加えるなど、その企業等に合ったさまざまな人材を選抜することで機会均等が確保されると考えた。

R

私は①の競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことだと思う。理由は、そうすることによって頑張れる人が出るからだ。私は自分で結局的に勉強や運動をすることができない。やらなくても生きていけるからだ。しかし友達と点数高い方が勝ちね、や 100 メートル負けた方がアイス奢りね、など友達と一緒に競争することによって頑張ることができた。しかし②の受験という競争は違うのではないかと考える。理由は受験は人生を決める大事な選択だからだ。学校の小テストや体育の徒競走で今後の人生が決まる人はきっと 10%もいないと思う。しかし受験というのは受ける人全員の人生が決まる。ここの高校、大学に入れないと自分のなりたい職業に就くことが出来ないなど多いはずだ。しかしなんとなく大学に入ればいいやという人も受験する人の中にはいる。そのような人があまり勉強しなくても地頭がいいからそれなりに解けてしまい、絶対にこの大学に入りたい、入らないといけないという人がどんなに勉強を頑張っても思うようにいかず負けてしまう。これは少し違うのではないかと思う。受け入れ側もテストの点だけでなくこれからの人生を考えた上で入学を許可した方がいいと思う。面接もあるがそんなものは嘘で通用する。入学させる側の教師が嘘偽りなくどのようなことを目指しているのか明確に受け入れ側に資料を渡せば少しは変わるのではないかと思う。私は競争心で勉強や運動を促すことは大切だと思うが受験は違うと考える。

S

自分は3番の「能力主義」と「学歴社会」について取り上げたいと思う。今の日本は昔ほどではないが学歴が1番大切だと考える人がいる。そのため、「G-MARCH」や「早慶上智」といった難関大学に入学したいという人も多い。この人たちを否定するわけではなくある程度の基礎知識は必要である。だが、自分は名前だけで大学を選ぶのは最もよくない選び方だと考えている。その大学に行って自分が学びたいことを学べるかが重要である。面接等では学歴を聞かれそれが加点になることもあるが、その人が実際仕事ができるかはわからない。現にいわゆる偏差値が低い大学を卒業しても仕事ができる人は存在する。このことから自分は「学歴」と「仕事ができる」というのは比例しないのではないかと考えた。そのためこれからの社会では学歴社会ではなく能力主義の社会にすることでより多くの優秀な人材を得ることができると考えた。

T

この講義をうけて、私は1の競争心の必要性について述べる。私は、競争心からやる気をあげることに非常に賛成である。なぜなら、競争をモチベーションの一部とみているからだ。授業資料から、「そのこと自体の面白さから出てくるもので、他の人より秀でたり競争で勝ったりすることから得るものではない」と記載されていたが、競争することで、面白さが芽生えるのではないか。確かに、元々にそのこと自体の面白さがあり、「面白い」と感じてやる気に繋がるのならそれで構わないだろう。その場合、競争を必要としないということにも納得できる。しかし、面白味も感じず、やる気がないのであれば、別の方法でやる気を出すしかないだろう。だが、競争をやる気の動機づけの一環としてみるにはリスクは大きい。それは勉強でも、運動でも、勝ち負けが存在するからだ。テストであっても、スポーツの試合であっても、自分が勝つということは、誰かが負けるということであって、逆に、誰かが勝つということは、自分が負けるということである。そして、自分が勝ったから相手が負けて、自分が負けたから相手が勝つという風にも言える。そこまで思わなくても、競争をする中で、誰もがこのような感覚に自然と陥ることは事実である。下手をしたら、「負け」を味わうことでモチベーションとは逆効果になってしまう恐れがあるということもある。このようなリスクを背負ってまで、競争をする必要性というのは、自分を成長するための糧となっていてほしいからだ。これは理想論に過ぎないが、競争を経て、勝ちの喜びや負けの辛さを味わうことで、それが経験となり、人生が豊かになるのではないだろうか。また、競争をすることで、明確な目標が立てられることも事実である。他者や自分を越えることで、成長するのではないのだろうか。よって、自分が成長する上でも、競争は必要であると考えた。

U

私は、1「競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なこととと思いますか」について考えた。競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動

でも必要だと考えた。なぜなら、競争をすることはその人の才能に気付かせる環境であるからだ。私は中学時代から吹奏楽部でのレギュラー争いで受かった時の達成感が好きでそれは競争をすることで起きる感情だ。学力に関しては部活を真剣に取り組みすぎて手に付けておらず得意ではない分、努力していい評価をもらえた際に達成感を感じることがあった。ここから、人間自分の得意不得意があるし何か才能は持っているべきだからそれを導き出し頑張ろうと思わせ、評価する立場である教師が認めてあげることが授業プリントにある競争心の問題点である敗者の自信の消失を防げる対策ではないかと考えた。また、私の場合だが敗者を経験することで次は頑張ると成長に繋がる場合も考慮できると考えられるし、その失敗した分野と違った才能を教師が見つけその分野に自信をもってもらえる環境づくりもできるのではないかと考えた。

次に2「受験という競争に関してどのように考えますか」について考えた。私は受験戦争をするべきだが、学費など競争をするための条件は共通してそろえるべきだと考えた。資料7-2を見ると家計的に恵まれていない人はいくら頭が良くても行きたい所にいけないと記述されている。私は高校時代に公立受験を受けており、学費で悩んだ記憶がある。私の友達も私立を滑り止めにし、学費が高いためだけに本来はもっと上の所にいける学力なのに学費の負担を減らすために受験高校のランクを下けている人は多いと感じる。また、授業プリントにもあるが企業の偉い人の子供は権利が高くなるなどの身分に関しても不利になる場合がある点が選抜機能において不利だと考える。しかし、受験というのは社会的地位の選抜として捉えられる。普段、大学でも自分は頑張っているのに他人は人任せでつらい人が報われることはよくある。頑張った人たちへの努力の成果は競争で現れるため能力主義は残しつつ学力を行うための負担を減らすべきだと考えた。

このように、努力は競争心から生まれるものであるため条件を共通することで自分の能力を発揮できる環境を広げること。競争をする上で、評価をする教師という立場が児童の才能を見つけ自信をつけさせることを留意するべきである。

V

1、私は必要だと思います。なぜなら私自身、運動も勉強も競争心を持って頑張ってきたからです。競争心を持って上を目指すことは良いことだし、必要不可欠だと思います。日本には切磋琢磨という四字熟語があるように、仲間と競い合い励まし合って、向上していくという意味があります。このように競争するからこそ、得られるものがあると私は思います。しかし、その競争という意味を履き違えてしまい、自分より上の人には萎縮し、下の人には威張ってしまっている部分があるというのが問題です。資料にもあるように「エリート」は、ともすれば尊大になり「そうでない人」を見下す、このような考え方が生まれてしまっているから競争というもののイメージが悪くなってしまっているのだと思います。そういった悪い部分は無くすべきだと思います。より良い教育のためにも、競争は必要だと思います。

4、教育と格差はそう簡単には切れない関係だと思います。世の中には貧富の差などがあり、

良い教育を受けるにはお金がかかります。そういった事柄がある以上は教育に格差が生まれてしまうことは仕方ないと思います。貧富の差などによって教育の差が生まれることはどうしてもできませんが、他の差はなくせると思います。資料にも書いてあるように、エリート選抜からマス選抜へ、エリート選抜を対象にしていたものを進学しなかった層の選抜にも注目するなど、そういった格差を減らしていくことはできます。教育は全員が平等に与えられるものであり、全員にチャンスがあるものであって欲しいと私は思います。なので、なるべく無くせる格差は無くしていきたいと考えています。

X

3「能力主義」や「学歴主義」に関してどう思いますか？について述べていこうと思う。

能力主義というのはその人物が持っている総合的な能力を見て判断することである。これは受験や試験、審査をする時によく使われる基準となっている。結論から述べると、私は能力主義は良いと考えている。能力主義で問題とされているのは主に2つあることが8-2(7-2)の資料から読み取れる。

1つ目は、家計や環境などの外的要因による影響が関係している点だ。外的要因による影響が関係することによって、本人だけの能力や努力では無い「運要素」が生まれてしまうのだ。具体的には、家庭的や家系的に恵まれた人の方が、ハーバード大学などの良い大学に入ることができるといった場合もあり、運による影響はあると言えるだろう。しかし、これは能力主義に限った話では無い。全員を平等に捉える平等主義であったとしても、能力の高い人と能力があまり高くない人が平等に扱われることにより、低い人の方が得をするといった「運要素」が絡んでくると考えられる。また、良い大学に入るのが家庭的・家計的に恵まれた人が多いとしても、恵まれていない人も一定数存在するため、運要素も本人だけの能力や努力で埋めることができると言えるだろう。

2つ目は、格差社会が大きくなってしまう点だ。能力の善し悪しを判断基準とする能力主義では、脳力がある人が上で、能力がない人が下であるという認識が強くなってしまふと考えられる。そのため、試験や受験で合格した人が尊大となり、そうでない人を見下し、そうでない人は自らの能力の無さを攻め、社会不安や劣情が蔓延していく恐れがあると言われている。これは能力主義に頼りすぎていることが要因であると私は考える。現代ではほとんどの試験等が能力主義を基準としている。人によっては中学受験などの幼い頃から能力主義に囚われていただろう。全てを能力の善し悪しで判断しているため、不安感や劣情を抱いてしまう人が現れるのだと私は考える。そのため、能力主義の考え方だけでなく、その人が出した結果を基準とする「結果主義」などの別の考え方を取り入れていくのが大切であると言えるだろう。

能力主義によって起こる問題について今回考えたが、能力主義の考え方自体に問題があるのではなく、その使い方によって弊害が起こっているように思われるため、扱い方を変えていき活かしていくことが重要だと私は考える。